

# Equi-verb の論理構造\*

加 藤 力 也

## 1. 課 題

1.1 前回の発表（日本英文学会北海道支部第16回大会，1971年10月20日，於北海道大学文学部＝加藤（1972））で，O. Jespersen, R. W. Zandvoort 及び P. S. Rosenbaum の見解を比較検討することによって，伝統的に「不定詞付き対格（Accusative with Infinitive）」と言われる構造，具体的には名詞又は代名詞＋to 不定詞を取り得る動詞を4種類に分類することを提案し，それぞれに一応の深層構造を設定した。これを簡単にまとめて，今回の発表の出発点としたい。

加藤（1972）で上げた動詞の中には疑問に思われるものがいくつか入っていた。今回はそれらを除き，新たに確実と思われるいくつかの動詞を追加することにする。又意味上類義語とみて差し支えないと思われるものを；でまとめた。深層構造（Deep Structure）及び例として上げた樹図（tree）は各構造の差異を示すのが目的であって，おおまかなものである。なお，議論に関係がないので，助動詞（Aux）要素とNPを展開した際の主要名詞（head noun）であるN=itを省略する。

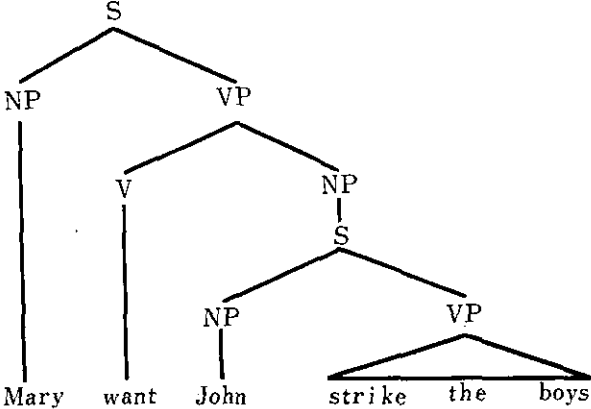
\* 本稿は，日本英文学会北海道支部第21回大会（1976年10月9日，北海道教育大学）において，「不定詞付き対格」の論理構造について」と題して口頭発表したものに加筆修正したものである。そこでの質問意見には注で答えたつもりである。参加者に感謝する。

- (1) 参照文献は，Jespersen については Jespersen (1940) 及び Jespersen (1933), Zandvoort については Zandvoort (1945), Rosenbaum については共著をも参照にしたが，主なものは，Rosenbaum (1965) 及び Jacob & Rosenbaum (1968), その外 Rosenbaum (1966), Rosenbaum (1967) 等。
- (2) 最終的には意味論的統語的テストによって決定されなければならないのは言うまでもない。現段階では，あくまでも発見助成的又は試習的（heuristic）なものである。例としては上げていない expect のように2類（又は3類）にまたがる動詞もあるのではないかと考えている。

(a) verbs: desire, want, wish ; like, love, prefer ; hate, dislike ; etc.

D. S.: [<sub>VP</sub>V + [<sub>NP</sub>[<sub>S</sub>NP + VP]]]

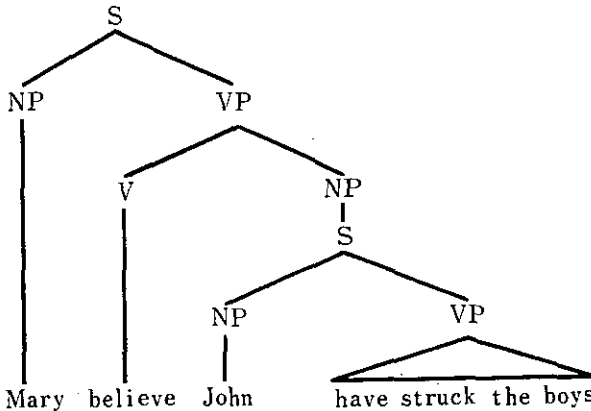
ex. Mary wanted John to strike the boys.



(b) verbs: consider, believe, think ; assume, imagine, suppose ; find, perceive ; prove, show ; etc.

D. S.: [<sub>VP</sub>V + [<sub>NP</sub>[<sub>S</sub>NP + VP]]]

ex. Mary believed John to have struck the boys.



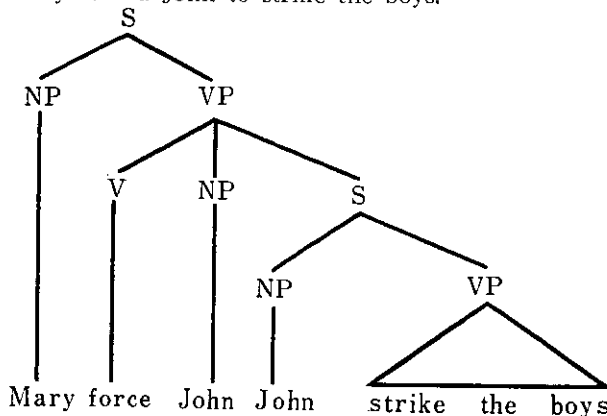
(c) verbs: compel, force ; coax, persuade ; allure, entice, induce, tempt ; etc.

(3) choose, elect, select は c 類に一番近いと考えられるが、現段階では保留しておく。

Equi-verb の論理構造

D. S.: [<sub>VP</sub>V+NP<sub>i</sub>+<sup>(4)</sup>[<sub>S</sub>NP<sub>i</sub>+VP]]

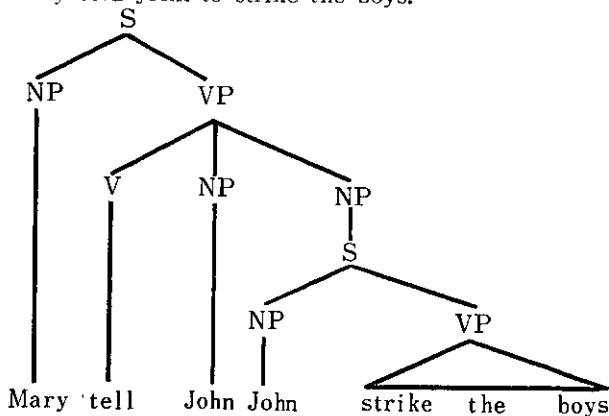
ex. Mary forced John to strike the boys.



(d) verbs: command, order, tell; advise, recommend; ask beg, entreat; request, require; allow, permit; etc.

D. S.: [<sub>VP</sub>V+NP<sub>i</sub>+<sup>(5)</sup>[<sub>NP</sub>[<sub>S</sub>NP<sub>i</sub>+VP]]]

ex. Mary told John to strike the boys.



(4) d 類との差を示す事が目的なので、いわゆる他動詞句補文 (transitive verb phrase complement) の構造を用いているが、動詞句補文の存在には疑義があり、むしろ次の D. S. の方が適切かも知れない。

[<sub>VP</sub>V+NP<sub>i</sub>+<sub>Prep</sub>Prep+[<sub>NP</sub>[<sub>S</sub>NP +VP]]]

これは又 Rosenbaum (1965) の Transitive Oblique Noun Phrase Complementation の深層構造図に相当するものである。なお、注(6)参照。

(5) [<sub>VP</sub>V+[<sub>NP</sub>[NP<sub>i</sub>+VP]]+<sub>Prep</sub>Prep+NP<sub>i</sub>] の方がより深層構造に近く、

1.2 加藤(1972)の後、次に取り組みたいと考えたのは、A. S. Hornby; Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English などによって、いわゆる不定詞付き対格構造を取り得る動詞を洗い出し、種々の(加藤(1972)の Appendix に上げたような)変形テストを適用してみることであった。そして、そのためにはより確実と思われる変形テストの数を増すことが必要であると考え、変形文法の発展によってこれが可能になるだろうと予想していた。

そして、ここ数年で b 類の動詞の統語論的行動 (syntactic behavior) から出発して、すべての言語に普遍的な変形としての Raising が大きな問題になってきている。しかし、卒直に言って私には当惑すべき問題が残ってしまった。それは c 類と d 類の区別についてである。加藤(1972)でみたように、Jespersen (1940) は a+b 類, c 類, d 類の3つに分類し、更に c 類については「人が動詞の直接目的語、そして不定詞が(多少とも場所的な意味を持つ) to によって連結された三次語 (tertiary) と考えられる場合」<sup>(6)</sup>、d 類については、「人が動詞の間接目的語で、不定詞が直接目的語と考えられる場合」と明言している。これに対し、(Zandvoort も同じであるが) Rosenbaum は a 類, b 類, c+d 類の3つに分類している。或いは、実際の変形テストに用いられている動詞は persuade を典型とする c 類に属する動詞なので、d 類を問題にしないというのが正しいのかもしれないが、例として動詞を上げる時には、

これから与格変形 (Dative transformation) によって、本 D. S. が導かれると考えるのが一般的かもしれない。いずれにしても同一名詞句削除変形 (Equi NP Deletion) の引き金 (trigger) となる NP が補文の中の削除される NP よりも前に来る構造が必要になるだろう。

- (6) Chomsky (1965) は一般に a 類に入るとされる expect との対比で persuade を取り上げ、persuade の後の NP は直接目的語 (Direct-Object) であり、又深層構造ではこの NP を主語とする補文 (sentential complement) は前置詞 of を持つ前置句 (Prep-Phrase) に埋め込まれたものと考えの方が適切だろうと述べている。これは Rosenbaum (1965) の Transitive Oblique Verb Phrase Complementation に相当する。なお、「これら二つの(動詞が取る)構文 (construction) の間の根本的な相違を指摘した英文法書 (English grammar) は一つもなかった」としており、当然ながら Jespersen (1940) は参考文献に上げられていない。

c 類と d 類の動詞が一類にまとめられている。<sup>(7)</sup>

その後、変形理論の枠組では、比較的最近のものを取り上げれば、梶田 (1974), Thomas & Kintgen (1974), Akmajian & Henry (1975) に、この問題に関するまとまった記述がみられる。しかし、a 類を一類、b 類を一類、c 類と d 類を区別せずに一類にする伝統は変わっていない。詳細を述べる余裕はないが、種々の変形テストによって a 類と c+d 類の深層構造を設定し、次に同じテストを b 類に適用することによって、b 類の深層構造は a 類と同じものであり、派生 (derivation) のある段階で (同一名詞句削除変形 (Equi NP Deletion) を受けた後の) c+d 類と同じ構造に変化することを提案するものである。<sup>(9)</sup>

又主として Raising, より正確には Subject to Object Raising を扱った長谷川 (1973), Postal (1974), Raising の arguments を持つ Bach (1974), Raising verb を区別する変形を論じた Kuno (1974) においても、c 類と d 類を区別していないように思われる。

ここで、c 類と d 類が取る深層構造は、ともに同一名詞句削除変形に

(7) これは主として、Jacobs & Rosenbaum (1968) に基づくものである。Rosenbaum (1965) に戻れば、(Appendix に分類してある動詞は疑問なものも多いが、大筋としては) Object NP complementation を取る動詞中の optional extraposition 類及び Intransitive Oblique NP Complementation を取る動詞が a 類に当る。Object NP Complementation を取る動詞中の obligatory extraposition 類が b 類に当る。Transitive VP Complementation を取る動詞が c+d 類に当るわけであるが、この中から d 類に当るものを取り出し、残りを Transitive Oblique NP Complementation を取る動詞と合わせて c 類とし、更には疑問の多い VP Complementation よりも Transitive Oblique NP Complementation に当る構造を与えるべきだと言うのが私の考えである。(つとに Rosenbaum (1967) で削除されているのではあるが) Oblique VP Complementation を取る動詞を、V+Prep を一つの単位とみることによって、ここに加えることも可能であろう。

(8) 以下に取り上げる著作の「不定詞付き対格」構造を取る動詞の分類を、比較を容易にするために、appendix として示す。特に後半に取り上げるものは、Raising を論ずるためのものであり、このような比較は的はずれのものかもしれないが、私の意図は c 類と d 類の区別がなされていない (或いは d 類は無視されている) 実情を示すことだけである。なお、Postal (1974), Bach (1974) 及び Kuno (1974) については、Postal (1974) に従い a 及び b 類を Raising Verb, c 及び d 類を、後に述べるように Equi-Verb とまとめる。

(9) 長谷川 (1973) の A 説に当る。

よって補文内の主語名詞句を削除して表面構造 (Surface Structure) になることに着目し, c 類と d 類の動詞を Equi-verb と呼ぶことにする。

1.3 誰でもすぐ気が付くことであると思われるが, c 類と d 類では不定詞によって表わされる動作に対する含意 (entailment) において対立する。すなわち, c 類では不定詞で表される行為が実際に行なわれたことを意味するのに対して, d 類は必ずしもそれを意味しない。

c 類: *Mary	forced persuaded ⋮	the doctor to examine John.
but he didn't.		

d 類: Mary	ordered permitted ⋮	the doctor to examine John,
but he didn't.		

更に, 両者の対立は様々な変形テストによって明らかにされることが予想される。実際, 加藤 (1972) の Appendix には不定詞構文を用いたテストだけでも5つ上げている。これらのテストと更に追加すべきテスト, そしてその適用結果についての研究は別の機会に行いたい。この論文では, Jespersen に従い動詞の後の NP は c 類では直接目的語であり d 類では間接目的語であるという仮説を立て, 他の言語, 特に不定詞を持つヨーロッパ諸語において, c 類及び d 類に対応する動詞がこの NP に対してどのような格表示 (case marking) を要求するか調査してみたい。又, 不定詞が持つ性質或いは機能の解明に役立つことがあれば, これをも調べてみたいと考える。これによって可能ならば, 1.1 に上げた深層構造よりも更に一步進めて, 各構成素 (constituent) の機能を考慮した論理構造 (logical structure) とでも呼ぶべきものを設定する足掛りを見つけないかと考える。

一つの言語は, ある意味概念に対して, その言語独得の言語表現を持

## Equi-verb の論理構造

つことが普通である一方、他の言語がこの意味概念に対応する何らかの言語表現を持つことも事実である。そして、一人の話者が二つの言語を熟知していれば、この意味概念に対する二つの言語による表現は完全に近い対応関係を持つものと考えられる。この様な場合、一つの言語の言語表現は他の言語の言語表現の解明に役立つものと期待される。

勿論、先の仮説は英語を用いた意味的、統語論的テストによって論証されるべきものではあるが、もし実際に他の言語で二つの NP の格表示が区別されたならば、英語における二つの NP の差異に対する一つの傍証になるものとする。

## 2. 資 料

2.1 Informant はアメリカ言語学会主催 1976 年度夏期言語学講座（7 月 28 日～8 月 20 日、於 SUNY-Oswego）参加者の中から、Dutch, Swedish, German, French, Italian, Spanish の native speaker を一人ずつ依頼した。一応先に述べたように二ヶ国語熟知の条件を満たしているものと考えたが、Swedish, Italian については疑問が残るように感じている。しかし、他に native speaker がいない場合もあり、又このような情報は二人から求めてはならないことが不文律であるため止むを得なかった。

テストフレームは、

Mary \_\_\_\_\_  $\left\{ \begin{array}{l} \text{the doctor} \\ \text{him} \end{array} \right\}$  to examine John.

空所には各動詞の過去時制を入れ、最も近いと思われる表現を書いてくれるよう依頼した。なお him が the doctor と異なる格表示をとる場合にはそれも書くように頼んだが、結果的には同じ格表示になることが分った。<sup>(1)</sup>

テストした動詞は、c 類は tempt, entice; persuade; force, compel,;

(1) ただし、Spanish では問題が残る。3 人称単数男性代名詞では、与格と対格の区別はないが、3 人称単数女性、3 人称複数男性及び女性代名詞にはこの区別があることが後に分った。

d 類は allow, permit; order, command; advise; ask, beg; request, require; 更に NP の格表示については d 類と同類と思われる promise.<sup>(2)</sup>

なお、セミコロン中の二語は andor の関係にあり、例えば tempt, entice については一つの文でもかまわないことにした。

2.2 調査結果を示し、次節の整理の図示に合わせて、問題となる点を述べることにする。

(1) Swedish

Informant; Birgit Nilsson

compel force		Mary tvingade doktorn att undersöka John.
persuade		Mary övertalade doktorn (till) att undersöka John.
entice tempt	or	Mary lockade doktorn till att undersöka John. Mary lurade doktorn till att undersöka John.
allow permit		Mary tillät doktorn att undersöka John.
command order		Mary kommanderade doktorn att undersöka John. Mary befallde doktorn att undersöka John.
advise		Mary rådde doktorn att undersöka John.
ask beg		Mary frågade om doktorn ville undersöka John. Mary bad doktorn undersöka John.
request require		Mary krävde av doktorn att han skulle undersöka John.
promise		Mary lovade doktorn att undersöka John.

1. persuade; entice, tempt 相当語では不定詞の前に to に相当する前置詞 till が用いられている。但し, persuade 相当語の場合は随意。

2. ask については、英語に直訳すれば Mary asked if (the) doctor

(2) 実際には一種のコントロールグループとして、a 類の動詞 desire, want; like, prefer; hate, dislike も調査した。これらは Dutch の want に相当する動詞が不定詞構文を取っただけで、外はすべて英語で言えば that 節を取った。したがって、the doctor の主格形が現れ、c, d 類の格表示の認定に役立った。



would examine John となる表現が用いられている。<sup>(3)</sup> これで原文の意味になるという意見であったが、資料としては疑問視したい。

3. beg に相当する語は原形不定詞を取るが、整理の段階では無視する。

4. request, require に相当する語には of (the) doctor に相当する形式、いわば奪格 (Ablative) が用いられている。更に不定詞構文ではなく英訳すれば that he should examine John となる名詞節が用いられている。

5. request, require に相当する語以外の語は、同じ格表示の名詞形を取っている。なお、これは主語の場合と同じであるが、目的格 (Objective) とみなすことにする。

(2) Dutch

Informant; Willy van Langendonck

compel force	Mary dwong de docter John te onderzoeken.
persuade	Mary overtuigde de dokter (ervan) John te onderzoeken.
entice tempt	Mary verleidde de dokter (ertoe) John te onderzoeken.
allow permit	Mary <i>liet</i> de dokter <i>toe</i> John te onderzoeken. Mary <i>stond</i> de dokter <i>toe</i> John te onderzoeken.
command order	Mary beval de dokter John te onderzoeken.
advise	Mary <i>raadde</i> de dokter <i>aan</i> John te onderzoeken.
ask beg	Mary vroeg de dokter John te onderzoeken. Mary smeeke de dokter John te onderzoeken.
request require	Mary eiste van de dokter dat hij John zou onderzoeken.
promise	Mary beloofde de dokter John te onderzoeken.

(3) 予備調査の段階で似たような結果が tell について起ることが分り、tell をはずした。

1. 随意要素ではあるが, tempt 相当語には to it に相当する erfoe (=it to) がきている。又 persuade 相当語には of it に相当する ervan (=it of) がきている。

2. request, require に相当する語については Swedish の場合と同じことが言える。

3. allow, permit 更に advise に相当する動詞はその接頭辞が目的語の後に置れているが, この特徴は無視してよいだろう。

4. request, require に相当する語以外の語については Swedish と同じである。

(3) German

Informant ; Waltrud Brennenstuhl

compel force	Mary zwang den Doktor zu untersuchen.
persuade	Mary überredete den Doktor zu untersuchen.
entice tempt	Mary brachte den Doktor zu untersuchen.
allow permit	Mary erlaubte dem Doktor John zu untersuchen.
command order	Mary befahl dem Doktor John zu untersuchen.
advise	Mary riet dem Doktor John zu untersuchen.
ask beg	Mary fragte den Doktor John zu untersuchen. Mary bat den Doktor John zu untersuchen.
request require	Mary verlangte von dem Doktor John zu untersuchen.
promise	Mary versprach dem Doktor John zu untersuchen.

1. compel, force; persuade; entice, tempt 更に ask, beg に相当する語が定冠詞の変化形によって対格 (Accusative) を取る。

## Egui-verb の論理構造

2. request, require に相当する語は, Swedish, Dutch の場合と同じく奪格を取る。ただし, 不定詞構文が続く。

3. 他は定冠詞の変化形により与格 (Dative) を取る。

### (4) French

Informant; Marie-claude Paris

compel Marie a contraint le docteur à examiner Jean.  
force Marie a forcé le docteur à examiner Jean.

persuade Marie a persuadé le docteur d'examiner Jean.

entice Marie a attiré le docteur à examiner Jean..  
tempt Marie a tenté le docteur d'examiner Jean.

allow Marie a permis au docteur d'examiner Jean.  
permit

command Marie a ordonné au docteur d'examiner Jean.  
order

advise Marie a conseillé au docteur d'examiner Jean.

ask Marie a demandé au docteur d'examiner Jean.  
beg Marie a supplié le docteur d'examiner Jean.

request Marie a demandé au docteur d'examiner Jean.  
require

promise Marie a promis au docteur d'examiner Jean.

1. compel, force; persuade; entice, tempt 更に beg に相当する語は定冠詞 *le* のみがついた名詞を取っており, これは主語の場合の名詞形と同じであるが, 人称代名詞では対立があり, 対格形とみなすことが出来るであろう。なお entice, compel, force に相当する動詞は一般的な不定詞標識 *du* でなく *à* を取っている。

2. その他は *to the* に相当する *a+le* の結合形 *au* を名詞に要求する。これは与格形とみなすことが出来る。なお, ask と request, require に対しては同一の動詞が用いられている。

(5) Italian

Informant; Marina Camboni

compel force	Maria ha spinto il dottore a visitare Giovanni. Maria ha forzato il dottore a visitare Giovanni.
persuade	Maria persuase il dottore a visitare Giovanni.
entice tempt	Maria tentó di far visitare Giovanni dal dottore.
allow permit	Maria permise al dottore di visitare Giovanni.
command order	Maria ordinó al dottore di visitare Giovanni.
advise	Maria awertí il dottore di visitare Giovanni.
ask beg	Maria chiese al dottore di visitare Giovanni. Maria pregó il dottore di visitare Giovanni.
request require	Maria ha richiesto al dottore di visitare Giovanni.
promise	Maria promise al dottore di visitare Giovanni.

1. compel, force; persuade に相する動詞は定冠詞 *il* のみがついた名詞を取っており、これは主語の場合の名詞形と同じであるが、人称代名詞の場合には対立があり、対格形とみなすことが出来るであろう。なお、不定詞は一般的な標識 *di* ではなく *a* を取っている。beg 相当語も対格形を取っている。

2. entice については、「この単語は知らない」との事、tempt は「きっとこれでいい筈」とのことであるが、強いて英語にすれば、'to have John examined by the doctor' で、tempt が attempt の意味にとられた恐れがある。資料としては疑問視したい。

3. advise に相当する動詞も対格を取っているが、普通は consigliare のようで、この語のテストが望まれる。

4. 他は to the に相当する *a+il* の結合形 *al* を名詞に要求する。これは与格形とみなすことが出来るだろう。

Equi-verb の論理構造

5. 動詞の時制の差違は無視する。

(6) Spanish

Informant ; Sally Battan

compel force	Maria forzó al doctor a examinar a Juán.
persuade	Maria persuadió al doctor a examinar a Juán.
entice tempt	Maria tentó al doctor a examinar a Juán.
allow permit	Maria dejó al doctor examinar a Juán. Maria permitió al doctor examinar a Juán.
command order	Maria mandó al doctor examinar a Juán. Maria ordenó al doctor examinar a Juán.
advise	Maria aconsejó al doctor examinar a Juán.
ask beg	Maria pidió al doctor que examinara a Juán. Maria rogó al doctor que examinara a Juán.
request require	
promise	Maria prometió al doctor examinar a Juán.

1. 全ての動詞が名詞の前に a+el の結合形である al を要求する。これは主語の場合の単なる定冠詞の el と対立する。これを目的格とみなすことにする。

2. compel, force; persuade; entice, tempt に相当する動詞は一般的な無標識の不定詞ではなく有標の不定詞を要求する。

3. ask と beg に相当する動詞は不定詞構文を取れず, that (he) examine John に相当する名詞節しか取ることができない。

4. request, require に相当する資料は後に述べる理由でもれてしまった。

2.3 前節の記述に従って、動詞の後の名詞が取る格表示を整理する。

北 星 論 集 第14号

なお、+ は不定詞に特別な標識が附随しているもの、\* は不定詞ではなく that 節に相当するものを要求するものを表す。

	Sw	Du	Ge	Fr	It	Sp
compel force	Obj	Obj	Acc	Acc <sup>+</sup> Acc <sup>+</sup>	Acc <sup>+</sup> Acc <sup>+</sup>	Obj <sup>+</sup>
persuade	Obj <sup>+</sup>	Obj <sup>(+)</sup>	Acc	Acc	Acc <sup>+</sup>	Obj <sup>+</sup>
entice tempt	Obj <sup>+</sup>	Obj <sup>(+)</sup>	Acc	Acc <sup>+</sup> Acc	?	Obj <sup>+</sup>
allow permit	Obj	Obj Obj	Dat	Dat	Dat	Obj Obj
command order	Obj Obj	Obj	Dat	Dat	Dat	Obj Obj
advise	Obj	Obj	Dat	Dat	Acc?	Obj
ask beg	? Obj	Obj Obj	Acc Acc	Dat Acc	Dat Acc	Obj* Obj*
request require	Abl*	Abl*	Abl	Dat	Dat	—
promise	Obj	Obj	Dat	Dat	Dat	Obj

3. 考 察

3.1 格表示に差別のある German, French, Italian を中心に考察し、格表示に差別のない Swedish, Dutch, Spanish については補足的に述べる。

(1) c 類の compel, force; persuade; entice, tempt に相当する動詞が取る NP は、German では対格 (accusative) の定冠詞を取り、French と Italian の定冠詞は主語形とは同じながら、d 類が取る形式と対立があり、又人称代名詞では主格と対格の対立があるので、(Italian の entice, tempt に相当する語に不備はあるが)、対格あるいは被動作主 (Patient) としての性質をもった直接目的語 (Direct Object) であることは

明らかであろう。

なお、Spanish に典型的にみられるが、不定詞が一般的な標識 (marker) でなく別種の標識を取っており、この事実は Italian の *compel, force, persuade* にも、French の *compel, force, entice* にも当てはまる。informant 達はこれらの動詞の構造に起る不定詞を単に別種の不定詞としか意識してなかった。しかし、ここで大胆な推測をすれば Spanish の *a* は *Juán* の前の *a* と同じもので、前置詞としての、具体的には方向 (Direction) 又更には結果 (Result) を表す、性質を持っているのではないかと考えられる。(これは Jespersen の「多少とも場所的意味を持った *to*」と言う意見に一致する。) これは同じ Romance 語である French の *à* と Italian の *a* に適用できるものではないだろうか。この観点からすれば、Swedish の *entice, tempt; persuade* が随意に前置詞 *till* (=to) を取ること、Dutch の *entice, tempt* が随意的であるが *ertoe* (=to it) を取ることはいうなづける。

(2) *d* 類の動詞のうち *allow, permit; command order; advise* (更にこの問題に関しては *promise*) に相当する動詞が取る NP は German では与格 (dative) の定冠詞を取り、French では *to the* に相当する *à+le* の結合形とされる *au* を取り、Italian では (適切な動詞でない疑いのある *advise* に相当する語を除き)、French と同様 *to the* に相当する *a+il* の結合形 *al* を取ることから、与格あるいは着点 (Goal) としての性質を持っており、間接目的語 (Indirect Object) と認めることが出来るであろう。

(3) *ask, beg; require, request* は簡単な概括をするには問題が多すぎるように思われる。実は初めは *ask, beg* だけしか求めていなかったのであるが、その結果が予想通りにいかなかったので、つまり German では対格形、French と Italian では与格と対格に分れ、Spanish では不定詞構造を取らなかったの、あるいはと思っていたことと関係があるのかもしれないと気づき、新たに *request, require* を追加してもらった。(Spanish が欠けたのは、この時にはすでに informant が *Oswego* を離れてしまったためである。)

“ask (or beg) something of a person” にみられる如く、これらの

動詞は意味上奪格の NP を取るのではないかということである。そして ask, beg よりも強く「求める」ニュアンスのある request, require ではどうなるだろうかと考えた。結果としては Germanic の三語だけはあるが、全て奪格形が現れた。又、Swedish と Dutch は不定詞構造ではなく、名詞節構造を取っているが、この特徴は Spanish にも ask, beg の場合と同様に当てはまるのではないかと推察される。

これ以上の考察は不可能であり、空論になるかもしれないが、ask, beg; request, require に相当する動詞が取る構造が、他と違っていたり、整合していないのは、それらの後の NP が間接目的語とみても、単なる与格<sup>(1)</sup>ではなく、起点 (Source) としての性格を持つためであろうと考える。

3.2 最後に、一般に深層構造として扱われるものよりは一步進めて、各構成素 (constituent) の主語 (Sub.), 直接目的語 (D. O.), 間接目的語 (I. O.), その他 (ここでは Adjunct と呼ぶことにする)<sup>(2)</sup> のいわば表面的な役割と、更に、動作主 (Agent), 被動作主 (Patient), 着点 (Goal), 起点 (Source) といった、述語 (predicate) である動詞に対する意味的論理的な関係を示す用語を用いて、c 類及び d 類の動詞が取る、仮りに論理構造 (logical structure) と呼ぶものを示しておく。なお、d 類の直接目的語に当る不定詞、厳密にはこれを支配する NP は動詞の内容 (Content) を表わすものではないかと考えており、これも付記することにする。

(1) native speaker の反応も一様でなく、もっと調査が必要であるが、これらの動詞の類義語を、'weak or polite' な表現から 'strong or high-handed' な表現の順に並べれば次のようになるのではないかと考える。

pray, entreat (implore, 頻度は下るが beseech, petition, supplicate も同ランク), beg, ask, request, require, demand (「不定詞付き対格」構文を認めるアメリカ人は多い)。

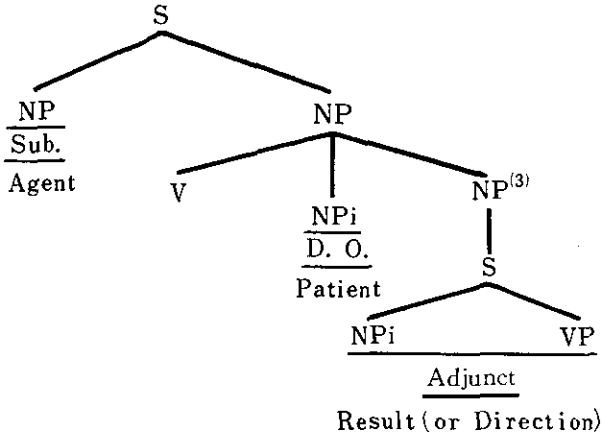
そして、この順に奪格の NP を取る性質が強まるのかも知れない。

(2) c 類及び d 類の動詞が取る主語は a 類 (及び b 類の一部) が取る主語と対立する。後者の場合は動作主よりは経験者 (Experiencer) であろう。

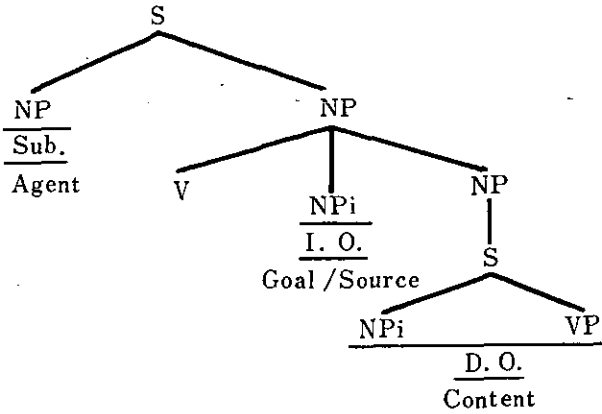


Equi-verb の論理構造

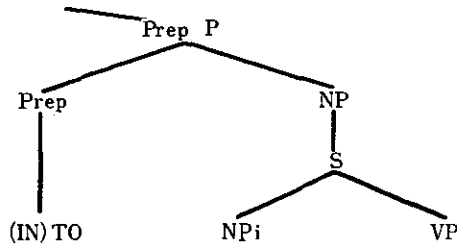
c 類 :



d 類 :



(3) 前置詞句 (Prepositional Phrase) をもって表現すれば (IN) TO の如き抽象前置詞を用いることが考えられる。



Appendix

梶田 (1974)

1.121 (=a): want; prefer (1.80).

1.122 (=c+b): compel; allow, defy, enable, tempt trust (1.101).

1.123 (=b): believe.

Thomas & Kintgen (1974)

Class I (=a): want, expect, prefer, demand, hope, (eager, anxious, willing).

Class III (=b): consider, name, suppose, think, believe, understand, presume, conclude.

Class IV (=c+d): persuade, require, remind, convince, compel, bribe, cause, encourage, force, impel, order, warn, make, etc.

Akmajian & Henry (1975)

A 9.2 (=a): prefer, want, hate, like, hope, desire, love.

A 9.3 (=c+d): force, persuade, allow, coax, help, order, permit, make, cause.

A 9.4 (=b): believe, assume, know, perceive, find, prove, understand, imagine.

長谷川 (1973)

a. (=c(+d?)): persuade, force, compel, see, dare, etc.

b. (=a): want, prefer, like, hate, love, etc.

c. (=b): believe, show, think, know, suppose, prove, etc.

Postal (1974)

Raising-verb

b-verb (=b): believe, consider, prove, find, etc.

w-verb (=a): expect, hate, intend, like, mean, need, prefer, want.

Equi-verb (=c+d): persuade, ask, compel, force.

Bach (1974)

Raising-verb (=b(+a)): believe, consider, expect, get, imagine, want (?).

Equi-verb (=c(+d?)): persuade, get.

Kuno (1974)

Raising-verb (=b(+a)): expect, believe, report, prefer (?), say (?).

Equi-verb (=c+d): persuade, order, ask, tell.

参 照 文 献

- Akmajian, A and Henry, F. (1975); *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*. M. I. T. 1975.
- Bach, E. (1974); *Syntactic Theory*. Holt, Rinehart and Winston. 1974.
- 長谷川欣佑 (1973) 「文法の説明力—‘Raising’ 論」, 英語青年, 119 卷 1~2 号 研究社。1973.
- Jacobs, R. A. and Rosenbaum, P. S. (1968); *English Transformational Grammar*. Ginn-Blaisdell. 1968.
- Jespersen, O. (1933); *Essentials of English Grammar*. George Allen and Unwin. 1961.
- (1940); *A Modern English Grammar, Part V*. Georg Allen and Unwin. 1959.
- 梶田 優 (1973) 「変形文法」, 英語学大系第 4 卷, 文法論Ⅱ。大修館 1974.
- 加藤力也 (1972) 「「不定詞付き対格」の深層構造について」, 北星論集, 9 号。北星学園大学。1972.
- Kuno, S. (1974); “A Note on Subject Raising,” *Linguistic Inquiry*, Vol. 5, No. 1. M. I. T. 1974.
- Postal, P. M. (1974); *On Raising*. M. I. T. 1974.
- Rosenbaum, P. S. (1965); *The Grammar of English Complement Constructions*. M. I. T. 1976.
- (1966); “A Principle Governing Deletion in English Sentential Complementation.” In R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, Ginn. 1970.
- (1967); “Phrase Structure Principles of English Complex Sentence Formation.” In D. A. Reibel and S. D. Shane (eds.), *Modern Studies in English*, Prentice-Hall. 1969.
- Thomas, O and Kintgen, E. R. (1974); *Transformational Grammar and the Teacher of English*. Holt, Rinehart and Winston. 1974.
- Zandvoort, R. W. (1945); *A Handbook of English Grammar*. Maruzen. 1960, 1963, etc.
- 
- 安井 稔 (編), 新言語学辞典。研究社。1971, 1975.

## Logical Structures of Equi-verbs

Rikiya KATO

The author believes that, as proposed in Kato (1972), English verbs which take so-called 'accusative with (to-)infinitive' constructions can be classified into four classes, although current transformational-generative grammarians seem to ignore the differences between verbs of class C and those of class D, and regard them as constituting one class. The four classes are:

- (a) desire, want, wish; like, love, prefer; hate, dislike, etc.
- (b) believe, consider, think; assume, imagine, suppose; find, perceive; prove, show, etc.
- (c) compel, force; coax, persuade; allure, entice, induce, tempt, etc.
- (d) command, order, tell; advise, recommend; ask, beg, entreat; request, require; allow, permit, etc.

The author suspects that the fundamental difference between the constructions verbs of classes C and D, which are called Equi-verbs as a cover-term in this paper, take is that NPs following the verbs of class C are Direct Objects, while NPs following those of class D are Indirect Objects, although present-day English does not distinguish between Accusative and Dative on the surface as in:

- (c) Mary persuaded *the doctor* (or *him*) to examine John.
- (d) Mary commanded *the doctor* (or *him*) to examine John.

From this point of view, investigation is carried out mainly on what kind of case-markings NPs following the verbs of six contemporary European languages (Swedish, Dutch, German, French, Italian and Spanish) which correspond respectively to the English verbs of classes C and D take. Attention is also given to the expressions in these languages which correspond to English infinitival constructions.

Finally, from the case-forms of NPs and forms of expressions following them, the author infers the functions and/or properties of the constituents the verbs of classes C and D take, and proposes two kinds of tentatively-called Logical Structures of Equi-verbs.